

【研究ノート】

物語文「おてがみ」の分析 —その構造と主題・理想について—

喜屋武 政勝

要約

小学校低学年むけ文学教材「おてがみ」について、その構造と「すじ」を分析しつつ、場面ごとの意味すること、登場人物の性格、そして作品でえがかれたできごとの本質的なもの、すなわち主題と理想を検討する。

キーワード：「おてがみ」、構造、すじ、性格、主題・理想

はじめに

アーノルド・ローベル作、三木卓訳の「おてがみ」は、小学校低学年の文学教材としてなれしたしまれている作品である¹⁾。文化出版局の絵本『ふたりはともだち』²⁾所収の5つのお話の最後をかざる物語である。

「一ども」手紙をもらったことのない「がまくん」のために、「かえるくん」が大いそぎでかいたお手紙を「かたつむりくん」にたくす、という単純なストーリーであるが、作品を形成する各場面の形象がゆたかにえがかれており、しかも主人公ふたりの人間関係の変化のなかに主題・理想がきちんと提示されている。

本稿では、奥田 1964 に依拠しつつ、作品を構成する場面をたどりながら、作品の「すじ」におけるそれぞれの場面の意味とはたらき、登場人物の性格、そして主題・理想を検討していく。

1. 概要

この作品のタイトル「おてがみ」は、「がまくん」がこれまで一度も、だれからももらったことのない手紙であり、毎日くることを切望している手紙であり、「かえるくん」がそんな「がまくん」のかなしみを理解して、彼をよるこばせようと大いそぎでかいた手紙である。また、「かたつむりくん」に配達をたくされた手紙であり、「四日」後にとどいた手紙である。くるあてのない、「かなしい きぶん」でまつ手紙から、時間はかかっても、かならずくるはずの、「しあわせな きもち」でまつ手紙へと、そのもつ意味がおおきく変化している。

この作品の構造をおおづかみにのべると、作品にさしだされている事件の前と後に、「がまくん」と「かえるくん」が、ふたりそろって、がまくんの家のげんかんのまえて、手紙をまつすがたが対照的に配置されている。つぎにあげたふたつの文で確認できるように、「かえるくん」が「がまくん」のために手紙をだすという事件の前と後とは、それぞれがコントラストのきわだつ形象として、さし絵とともにえがかれている³⁾。

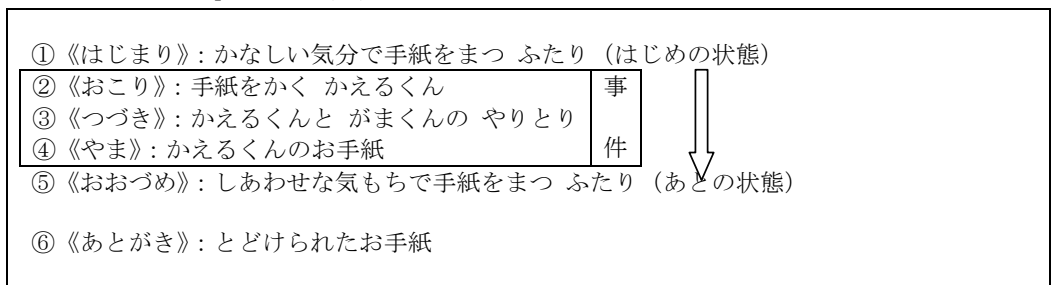
11.ふたりとも かなしい きぶんで げんかんの まえに こしを おろして いました。

54.ふたりとも とても しあわせな きもちで そこに すわっていました。

このふたつの文をふくむ場面は、作品の「すじ」上の機能としては、それぞれ、上述の、主要な事件のおこる前の状況、すなわち《はじまり》の状態と、事件の終結した後の状態、すなわち《おおづめ》の状態である。このなかにはさまれている事件が、発端＝《おこり》、展開＝《つづき》、クライマックス＝《やま》の発展とともに かたられるという物語である。そして《おおづめ》のあとにエピローグすなわち《あとがき》が配置されている。⁴⁾

いま、それぞれの場面のこみだしとともに、作品の構造図を下にしめす。⁵⁾

図1 「おてがみ」の構造(1)



2. 場面ごとの検討

① 《はじまり》かなしい気分で手紙をまつ ふたり

テキスト

1.がまくんは げんかんの まえに すわって いました。
～11.ふたりとも かなしい きぶんで げんかんの まえに こしを おろして いました。

作品「おてがみ」がえがく主要な事件とは、「かえるくん」が友人の「がまくん」のために手紙をかくこと、である。この冒頭の場面では、まだ事件はおこっていない。その事件に「かえるくん」をかりたてる動機となる状況がえがかれている。すなわち、「がまくん」が一度もだれからも手紙をもらったことがないこと、くるあてのない手紙を毎日「かなしい」気もちで、「ふしあわせな きもち」でまっていること、このことを親友の「かえるくん」がしる。そして、「ふたりとも かなしい きぶんで」お手紙をまつという形象で場面がしめくられる。ここでは、「かえるくん」は、友人のかかえているかなしみに つよく関心をよせ、それを理解し共有しているし、「がまくん」は、そんな友人にいっしょにいてもらって、かなしみのいくらかを軽減させてもらっている。この状況が、一方では、つづく《おこり》の場面における、手紙をかくという「かえるくん」の行動へと、他方では、《つづき》の場面であきらかとなる「がまくん」のふて寝へとつながってゆく。また、前述のように《おおづめ》の場面と対照をなしている。⁶⁾

② 《おこり》: 手紙をかく かえるくん

テキスト

12.すると、かえるくんが いいました。
～25.「すぐ やるぜ。」

「かえるくん」は、「11. ふたりとも かなしい きぶんで げんかんの まえに こしを おろして いました。」という状態のなかにあつて、「がまくん」の友人である自分がしてあげられることを一生懸命にかんがえていたにちがいない。なんとかして、かなしみにくれる「がまくん」をたすけてあげたいという一心で、友人の自分が「がまくん」へ手紙をだすという決断をする。「13.『ぼく もう いえへ かえらなくっちゃ、がまくん。しなくちゃ いけない ことがあるんだ。』」ここでは、「かえらなくっちゃ」「しなくちゃ いけない」という必要・必然を表現する述語形式がもちいられていて、自身の覚悟、決意、希望のような意味あいを表現している⁷⁾。ただし、この発話のきき手である「がまくん」は、めんくらったにちがいない。そして、自分といっしょに、くるあてのない手紙をまつこと以上に大事なことがあるのかと、おどろき、落胆し、怒りを感じたかもしれない。もちろん、「かえるくん」も「がまくん」も、自分のことで精いっぱい、相手の心中をしるよしもない。

「大いそぎで いえへ」かえてから、手紙をかき、「かたつむりくん」にたくすまでの「かえるくん」の動作は、次々にめまぐるしく交替する動作として、みじかい文によって、しかも完成相の述語形式⁸⁾の連続によって、たたみかけるように表現されている（…かえりました、…みつめました、…かきました、…いれました、…かきました、…とびだしました、…あいました、…いいました）。

この場面は、作品がさしだす主要な事件の発端であり、あとにおこってくるできごと（「かえるくん」と「がまくん」とのやりとり）を規定するものである。⁹⁾

③ 《つづき》：かえるくんと がまくんの やりとり
テキスト

26.それから かえるくんは がまくんの いえへ もどりました。
～42.かえるくんは まどから のぞきました。かたつむりは まだ やって きません。

《おこり》の場面において自分がだした「がまくん」への手紙を、いっしょにまつて、手紙がとどくよるこびの瞬間を共有したい「かえるくん」はどうぜん「26.・・・がまくんの いえへ もどりました。」と表現されている。「いきました」ではなく、「もどりました」とあるから、当初から「がまくんの いえ」にかえてくることは予定されていた。そこで、「かえるくん」がであった状況は、「がまくん」の「おひるね」（じつは、ふて寝）であった¹⁰⁾。「11.ふたりとも・・・」の場面では、かなしみを共有していたふたりだが、すでに、この場面では、「がまくん」をよるこばせようと意気こむ「かえるくん」と、くるあてのない手紙をまつことに「あきあき」し、いっしょにまつていてくれた「かえるくん」にも いえへかえられ、ふてくされる「がまくん」が対立している。

この人物の対立は、つづくふたりのやりとりに表現されている。ここでは、児童文学に特徴的な、反復法がもちいられている（28～32, 33～37, 38～42）。手紙（じつは自分のかいた）をもうすこしまつといいと説得する「かえるくん」と、それを拒絶し、いらいらした感情を相手にぶつける「がまくん」。みつつのパートの反復が、しだいにたかまるそれぞれの感情を表現し、つづく《やま》の場面にみちびく。¹¹⁾なお、みつつのパートをそれぞれしめくくる「かた

つむりは まだ やって しません。」という文の述語は現在形であって、眼前性をあらわすいわゆる「歴史的現在」がもちいられている。

④ 《やま》：かえるくんのお手紙

テキスト

43. 「かえるくん、どうして きみ ずっと まどの そとを 見ているの。」がまくんが たずねました。
～52. 「とても いい てがみだ。」

《つづき》の場面で反復的に提示された「かえるくん」と「がまくん」とのやりとり (28～32, 33～37, 38～42) は、ここにきて、転調する。さきほどまでは、まずさきに「かえるくん」の説得があつて、それに対して「がまくん」は拒絶(やつあたり、あまえ)でこたえるというくりかえしであったが、この場面では「がまくん」のほうから「どうして・・・」と、対話の口火がきられる。くりかえし、まどのそとをのぞく(「かたつむりくん」＝手紙の到来をまつ)「かえるくん」のしぐさに疑問をもつ「がまくん」がたまたまそのわけをたずねずにはいられなくなる。そして、そのまま、ふたりのやりとりが、もっとも対立する場面となる。

45. 「でも きやしないよ。」がまくんが いいました。

46. 「きつと くるよ。」かえるくんが いいました。

ふたりの発話は、それぞれ「でも こないよ」、「くるよ」といった表現とくらべてあきらかなように、つよいおもいがこめられている。まさに、ふたりの性格の対立が最高潮にたっているといえよう。つづく「かえるくん」と「がまくん」との対話は、そのような対立が和解へと一気にむかう、まがりかどとして機能している。

47. 「だって、ぼくが、きみに てがみ だしたんだもの。」

48. 「きみが？」がまくんが いいました。

「かえるくん」の発話 47 は、前の発話 46 の決定的な根拠である。手紙をだした本人が知っているからまちがいはない。「がまくん」も手紙がくることをみとめざるをえない。¹²⁾

なお、上のふたつの文の主語はいずれも「が」のかたちをとって(47. 「…ぼくが…」, 48. 「きみが？」), 相手にとって、まだしられていない新しい情報(未知情報)がさしだされていると同時に、《とりたて》の意味ももたされているとみなされる¹³⁾。

はじめてもらうことになる手紙の内容が気になる「がまくん」は、49. 「てがみに なんで かい たの？」とたずねずにはいられない。タイトルの「おてがみ」の具体的な文面が、ここで、あきらかとなる。《おこり》の場面では ふせられていた内容である(15. えんぴつと かみを みつけました。／16. かみに なにか かきました。／17. かみを ふうとうに いれました。)

50. 「ぼくは こう かい たんだ。『しんあいなる がまがえるくん。ぼくは きみが ぼくの しんゆうで ある ことを うれしく おもっています。きみの しんゆう, かえる』」

文面は、「しんあいなる」という、よそゆきのフォーマルな様式で はじまるが、それは単な

る形式ではなく、文字どおりの意味（「その人に親しみと愛情をもっていること」『明鏡』）で、「かえるくん」が「がまくん」を特徴づけている。さしだした自分のことを、おなじく「きみの しんゆう」と規定し、手紙の末尾をしめくくっていることと呼応している。手紙の本文は、「ぼくは きみが ぼくの しんゆうで ある ことを うれしく おもっています。」と、ふたりの親友という関係に対して日ごろからおもっていることを、自分自身もたしかめつつ、自分のかいた手紙の文面をおもいだして、たしかに相手につたえている。

それを「51.『ああ、』がまくんが いいました。／52.『とても いい てがみだ。』』といてうけとめる「がまくん」のすがたは感動的である。文面もさることながら、自分をよろこばせようと、ないしょで、いっしょうけんめい手紙をかいてくれた「かえるくん」の行為に対して感謝している。「いい」という評価的な形容詞の、この場面における意味あいを検討することは有意義な作業であるだろう。¹⁴⁾

⑤ 《おおづめ》：しあわせな気持ちで手紙をまつ ふたり

テキスト

53.それから ふたりは げんかんに でて てがみが くるのを まって いました。

54.ふたりとも とても しあわせな きもちで そこに すわっていました。

前述したように《はじまり》の場面とコントラストをなす場面である。「かえるくん」と「がまくん」の対立が最高潮にたった場面から、ここで事件は一定の決着をみる。¹⁵⁾「かえるくん」からその内容まで おしえてもらった手紙ではあるが、ほかの人にたくしてとどけられるうまれてはじめての「おてがみ」という形でうけとりたいとねがう「がまくん」、そして、そのよろこぶようすをたしかめたい「かえるくん」。このふたりの「まつ」という行為への移行は自然である。¹⁶⁾

⑥ 《あとがき》：とどけられたお手紙

テキスト

55.ながい こと まって いました。

～57.てがみを もらって、がまくんは とても よろこびました。

《おおづめ》において事件は一定の結末をむかえたわけだが、時間的な間隔があったのち（「四日 たって」）、ついに「かたつむりくん」が「かえるくんからのてがみを がまくんに わた」す。四日前の《おこり》の場面のつぎの箇所をおもいだすと、こっけいさ、おかしみがこみあげてくる。¹⁷⁾

24.「まかせてくれよ。」かたつむりが いいました。

25.「すぐ やるぜ。」

3. 登場人物の性格

前章では作品の「すじ」を形成する場面ごとに、その意味と はたらきを検討してきた。図1でしめした作品の構造図を、さらにくわしくして下にかかげる。ここでは、場面の推移、すなわち事件の発展の経緯をたどることによって、登場人物どうしの人間関係の変化と、それぞれ

の性格をとらえることができる。性格とは、すなわち、ある特定の人間関係のなかで現象する、登場人物の言動を一般化したものである。

図2 「おてがみ」の構造(2)

場面	がまくん	かえるくん
① 《はじまり》 かなしい気分で 手紙をまつ ふたり	5. 「…かなしい ときなんだ。… とても ふしあわせな きもち に…」 11. ふたりとも かなしい きぶんで げんかんの まえに こ しを おろして いました。	3. 「…きみ かなしそうだね。」
② 《おこり》 手紙を かく かえるくん	(この場面における「がまくん」の具体的描写はなし。) ・えっ? ・おいてけぼり? ・ちえっ。 ・おてがみ まつの やめた、やめた。 ・もう ねて しまおう。	13. 「…かえらなくっちゃ、がまくん。しなくちゃ いけない ことが…」 14. …大いそぎで いえへ… 15. …みつけました。16. かみに なにか かきました。17. …いれました。18. …かきました。 19. 「 がまがえるくんへ 」 20. …とびだしました。21. …かたつむりに あいました。 ○かたつむり 24. 「まかせてくれよ。」 25. 「すぐ やるぜ。」
③ 《つづき》 かえるくんと がまくんの やりとり	27. …おひるねを して いました。 A 30. 「いやだよ。」 × 31. 「…あきあきしたよ。」	26. …がまくんの いえへ もどりました。 28. 「がまくん。」 × 29. 「きみ、おきてさ、…」 32. …ゆうびんうけを 見ました。かたつむりは まだ…
	B 35. 「そんな こと あるものかい。」 × 36. 「ぼくに てがみを くれる人なんて…。」	33. 「がまくん。」 × 34. 「ひょっとして だれかが…。」 37. …ゆうびんうけを 見ました。かたつむりは まだ…

	<p>C 40.「ばからしいこと …。」×</p> <p>41.「いままで だれも…。きょうだって、…。」</p>	<p>38.「でもね、がまくん。」</p> <p>39.「きょうは だれかが…。」</p> <p>42. …ゆうびんうけを 見ました。</p>
<p>④ 《やま》</p> <p>かえるくんの おてがみ</p>	<p>D 43.「…、どうして きみずっと まどの そとを…。」</p> <p>E 45.「でも きやしないよ。」×</p> <p>48.「きみが？」</p> <p>49.「てがみに なんて…？」</p> <p>51.「ああ、」</p> <p>52.「とても いい てがみだ。」</p>	<p>44.「だって、いま ぼく てがみを …。」</p> <p>46.「きっと くるよ。」</p> <p>47.「だって、ぼくが、きみに てがみ だしたんだもの。」</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>50. …『しんあいなる がまがえるくん。ぼくは きみが ぼくの しんゆうである ことを うれしく おもっています。きみの しんゆう、かえる』…</p> </div>
	<p>54.ふたりとも とても しあわせな きもちで そこに すわっていました。</p>	
<p>⑤ 《おおづめ》</p> <p>しあわせな気もちで 手紙をまつ ふたり</p>		
<p>⑥ 《あとがき》</p> <p>とどけられた おてがみ</p>	<p>57.てがみを もらって、… とても よろこびました。</p>	<p>56.四日 たって、</p> <p>○かたつわり</p> <p>かえるくんからの てがみを がまくんに わたしました。</p>

「かえるくん」は、「がまくん」の窮状に関心をよせ、友人である彼のために何かしてあげることはないかとかんがえ、そして、すぐに具体的な行動にうつすことができる。世話ずきで、行動力がある。ただし、その行動力は、ややもすると、あとのことをじっくりみとおせない（せっかく「大いそぎで」かいた手紙を、だれであろう「かたつむりくん」にたくす）といった、おっちょこちょいでもある。世話ずきで、行動力があって、おっちょこちょい、とは、まさに愛すべき「善人」、つまり、お人よしである。

「がまくん」は、というと、この、よく気がつき、世話ずきで、行動力のある「かえるくん」の厚意にあまえているようである。あまえんぼうで、感情的な性格といえるだろう。ときに、がんこで意地っぱりな言動としてあらわれる。おさなく依存的である、といいかえてもいいだろう。

4. 作品の主題・理想

文学作品は、「感情＝評価的な態度」によって色ぞめされた「ことがら（生活現象）」、すなわち形象としてさしだされた絵巻物である。そして、この絵巻物は、形象の単なる連続ではなく、作品全体のなかに、志向性をもった思想（「理想」）によって方向づけられた「主題」が、一般的なものとして、本質的なものとして、表現されている。そして、ある事件がとりあげられた叙事的な作品においては、「すじ」の発展によって、登場人物の性格とともに、作品全体の表現する「主題」と「理想」をあきらかにすることができる。¹⁸⁾

「おてがみ」という作品が表現する本質的なもの、一般的なもの、つまり「主題」や「理想」はどのようにとらえられるだろうか。

岩手 気仙国語サークル 2009 では、つぎのように「主題」が文章化されている。

手紙をもらったことがない がまくんのかなしみが わかってお手紙を書いてあげる かえるくん。二人とも しあわせになったお話。（他人のかなしみに共感し、具体的に行動する人間の美しさ。）

千田 2010 では、次のように分析の授業として、つぎの6つの手順をふみつつ、主題にたどりついたことが記録されている（p26~p27 より項目を抜粋）。

- 1 登場人物を確認する。
- 2 大まかな作品の構造をとらえる。
- 3 かなしむがまくんのために、かえるくんがしたことを分析する。
- 4 かえるくんから手紙をもらったがまくんはどうなったか。
- 5 がまくんがしあわせになれたのはどうしてか。
- 6 「お手紙」がえがいていることは何か。

そしてみちびきだされた主題はつぎのとおりである。

いちどもお手紙をもらったことがない ふしあわせな がまくんのために、かえるくんが お手紙を書いてあげ、みんながしあわせになったお話。

上の研究と実践報告をうけ、大城 2015 では、主題と理想をつぎのように定式化された。

主題…手紙をもらったことがない がまくんのかなしみがわかった かえるくんがお手紙を書いてあげ、二人ともしあわせになったお話。

来るあてのないお手紙をまつかなしみから、やくそくされたお手紙をまつよるこびへとかわったお話。

理想…他人のかなしみがわかり（共感）、たすけようとじっさいに こうどうできる人は、すばらしい（うつくしい）。

上にみるように、ここでは、「かえるくん」と「がまくん」との人間関係の発展、すなわち作品の「すじ」を要約することで主題をまとめていることが特徴的である。場面よみにおいて想像してきた形象を、読者であるこどもたちは、もう一度、作品の全体を俯瞰することで「すじ」

をたしかめ、作品全体の構造をあきらかにすることで、そこに表現されている一般的なもの、法的なもの、すなわち主題と理想をあきらかにすることができる。一方、これらを、さらに抽象度をたかめ命題にまとめあげることも可能である。たとえば、つぎのように。

主題：・こまっているともだちのために、してあげられることを具体的な行動にうつすことのできる人（こと）、それがともだち（友情）だ。
・誠意ある行為は、かならず うけいられる。

理想：・こまっている人のために、してあげられることを具体的な行動にうつすことのできる人（こと）は、すばらしい（うつくしい）。
・誠意ある行為がうけいられことは、すばらしい（うつくしい）。

おわりに

文学作品は「ことば」によって表現された芸術である。したがって、その「ことば」を手がかりにして、積極的に、表現されている形象を想像する（「絵と感情」におきかえる¹⁹⁾）ことによって、よみ手である子どもたちは作品世界を体験することができる。そのうえで、作品の構造や「すじ」とおして登場人物の性格とその発展、さらに、作品の表現していることの本質（主題）、作品のうたえるメッセージ（理想）をよみ手である子どもたちは、それぞれの生活にひきよせて理解することができる。

本稿では、文学作品「おてがみ」の構造と「すじ」を分析し、場面ごとの検討をとおして、登場人物の性格、そして主題と理想を考察してみた。主題と理想の定式化（文章化）については、たとえば、佐藤照勝 1987 で提起された問題（「社会＝階級的なもの」と全人類的なものとの統一」p22）をふくめ、さまざまな作品と分析と実践報告をもとに実証的にあきらかにする必要がある。今後の課題としたい。

〔注〕

1) 現行の検定教科書では、教育出版のみ1年教材で、他の4社（光村、東京書籍、学校図書、三省堂）においては2年教材に位置づけられている。

2) 原作は1970 *Frog and Toad are Friends* 所収の“The Letter”。日本語訳は1972年発行。

3) テキストは1972 三木卓訳（文化出版局）による。番号は、便宜上、喜屋武が付した。以下おなじ。

4) 文学作品の「すじ」の定義については、奥田 1964 による。「〈…〉ひとつの事件のなかにあるいくつかの場面の、あるいはいくつかの事件の時間的な、原因＝条件的なむすびつきのことを『すじ』とよんでおこう。『すじ』というのは、作品の構造のなかにはいる、いくつかの事件（あるいは場面）の体系である。」（p66）。また、「すじ」を構成するモメント（場面）の名づけ、——《はじまり》《おこり》《つづき》《やま》《おおづめ》、あるいは《あとがき》——は、おなじく奥田 1964 による。

5) 岩手 気仙国語サークル 2009 参照。ただし、岩手 2009 で《つづき②》としている部分は、本稿では《やま》の前半に位置づけた。

6) 奥田 1964, p70 参照。「『はじまり』は『すじ』の出発点である。だが、この『はじまり』では、事件に先行するできごとがかかかっている、それは事件の発端を規定しはしない。事件のおこる状況をしめして、そこに登場人物をひきだしているにすぎない。〈中略〉この『はじまり』の部分にどのようなできごとをえがいているかということは、表現的には重要な意味があるだろう。〈中略〉、コントラストの効果がある。」

7) 奥田 1999, p224 参照。「ここでは〈引用者注：「しなければならない」を述語にもつ文においては〉動作主体の人称性にかかわらずに、はなし手は評価的な判断の主体としてあらわれてきて、述語にさしだされる、ポテンシャルな動作の実行を必要とみなしている。そして、動作主体が一人称のばあいでは、はなし手ははなし手自身の覚悟あるいは決意、あるいは希望のような意味あいをその《必要》につけくわえている。」

8) 完成相「する、した」のタクシス的な機能としては、つぎつぎにおこる継起的な動作を表現する、《交替形》であることが指摘されている（奥田 1993・1994, 工藤 1995）。

9) 奥田 1964, p70-71 参照。「『すじ』のなかには、まず、事件そのものの発端があたえられている。事件のこの段階を『おこり』となづけておこう。〈中略〉この『おこり』の機能は、人間の生活と人間関係とに変化をもたらす重大な事件をさしだしながら、そのことによって生活上のアクチュアルな問題をなげだすという点にあるだろう。〈中略〉『おこり』であたえられた事件は、ひきつづいておこる事件（あるいは状態）を規定する。」

10) 述語動詞の完成相「する、した」と、継続相「している、していた」のくみあわせは、《情況とのであい》として表現される。（奥田 1993・1994 参照）

11) 奥田 1964, p71 参照。「『つづき』の部分は、『おこり』であたえられた事件からひきつづいておこる、いくつかのできごとをえがきながら、事件にまきこまれた人たちの生活と関係とにおける変化をしめしているだろう。さらに、この部分では、事件がどのようにして決定的なモメントへみちびかれていくか、このことがしめされている。」

12) 「かえるくん」の発話 47 についてであるが、「がまくん」にかくそうとしていたことであるが、ついうっかり口からでてしまったのか、ふてくされる「がまくん」を決定的に説得するために事の真相をのべたのかは、よみがわかれるかもしれない。喜屋武の方は、「かえるくん」の「おっちょこちょい」といった性格から、前者のたちばをとりたいが、決定的なことは不明。なお、大城 2015 の実践記録では、以下のようによんでいる。（文番号は本稿とずれあり。下線は喜屋武。）

T, そう。がまくんも「でも」と言って反論していたよね。

54 の「でも、来やしないよ」と、56 「きつと来るよ」を比べると、お手紙が、来る・来ないの・・・

C, 二人の言いあらそい。／ 言いあらそい。

T, でも、かえるくんは、自分がお手紙を書いて、そして、かたつむりくんに配達をたのんだのだから、お手紙が来るのは確実である。いくらほげましのことばを言っても、がまくんからお手紙を待つことにあきたことや、「でも来やしないよ」と強い調子で言われる。がまくんから、こうも言われると、かえるくんはどうなる？

C, 頭にくる。／ おまえのことを心配しているのに。何だよ。／ わじわじーする。／ もうがまんできない。

T, ほんと。ほんと。まさに、そうだね。だから、とうとう・・・。58 を読んでみよう。

C, 「だって、ぼくが、きみにお手紙を出したんだもの。」

T, どうしたの・・・？

C, 先生, 言っちゃた。
自分ではらしちゃった。

T, がまくんに, あれこれ言われても, ずっと, がまんしてたのにな。なぜ, 言わなかったんだっけ。

C, がまくんが, ゆうびんうけに, お手紙が届くことを楽しみにしていることを知っているから。」

13) 主語における「は」と「が」のつかいわけについては大槻邦敏 1987 参照。

14) 奥田 1964, p71 参照。「事件はさらに発展して、『やま』にはいるわけだが, この『やま』は, 対立する性格のぶつかりあいがもっとも緊張する場面である。事件の発展が最高潮にたった場面であり, ここがまがり角になって, 事件は解決にむかう。つまり, 『やま』は一定の方向への事件の解決を規定するのである。『すじ』のなかで『やま』がもっとも重要な場面であるのは, ここでもっともあざやかに人間の典型的な性格があかるとみえるからである。そこにえがかれている事件が, 主人公の運命にとって決定的な意味をもっているからである。もっともあざやかに事件の意味をあかるとみえだすからである。〈中略〉

したがって, 『やま』は叙事的な文学作品の構造上の中心であり, 作品の主題はそこで決定的な表現をうけるだろう。主題に関係づけずに『やま』をあつかうと, 文学作品の認識論的な意味はなくなってしまうだろう。」

15) 奥田 1964, p71 参照。「『やま』のあとに『おおづめ』がやってくる。ここでは, 事件の発展の結果もたらされた状態がえがいてある。〈中略〉文学作品はこの『おおづめ』で結論をだして, えがかれた事件にたいする, その事件のなかで活躍する人物にたいする思想的な態度, 理想をしめしているのである。作家にとってみれば, そうでなければならない(あるいは, そうであってはならない) 人びとの状態なのである。」

16) なお, 「54.ふたりとも とても しあわせな きもちで…」については, 次にあげる, おなじ作者の『ふたりは いつも』所収の「おちば」の最後の場面を参照。

そのばん あかりを けて それぞれが おふとんには いったとき かえるくんも
がまくんも しあわせでした。(p53)

この物語は, 「かえるくん」と「がまくん」それぞれが相手をよろこばせようと, その家の庭のおちばをかきあつめてあげたものの, それぞれが家にかえるころには風でもとのままになっていて, 相手の善行にふたりとも気づかないのだが, 自分が相手をよろこばす行為をしてあげたことの満足感でふたりとも同様に「しあわせ」を感じている, というお話である。友情が利他的な行為をうみだすものであることと, それにともなう満足感, 幸福感をひきおこすものであるということを表現して, このふたつの作品は共通する主題をもつとおもわれる。

17) 奥田 1964, p75 参照。「エピソードでは, 基本的な事件がおわったあとにおこったできごと, あるいは『おおづめ』のあとでの主人公の生活状態がしめされていて, 『おおづめ』とエピソードとのあいだには時間的な間隔がある。ここでは基本的な事件にたいする思想的な態度, 理想が表現されているだろう。『おおづめ』で表現された理想は, このエピソードでいちだんとつよめられるか, おぎなわれるのである。」

18) 文学作品の内容にかかわる, 用語(「ことがら(生活現象)」「感情=評価的な態度」, 「主題」「理想」)については, 奥田 1963, 1964 による。

19) 奥田 1963 による。

【参考文献】

- アーノルド・ローベル作, 三木卓訳 1972『ふたりは ともだち』文化出版局
アーノルド・ローベル作, 三木卓訳 1972『ふたりは いっしょ』文化出版局
アーノルド・ローベル作, 三木卓訳 1977『ふたりは いつも』文化出版局
アーノルド・ローベル作, 三木卓訳 1980『ふたりは きょうも』文化出版局
岩手 気仙国語サークル 2009「お手紙」(教材研究プリント 未公刊)
大城勝政 2015「実践報告 文学作品の読み方指導 ―「お手紙」(東京書籍・2年上)―」
(12.27 教科研国語部会(小原集会) 沖縄 未公刊)
大槻邦敏 1987『「は」と「が」のつかいわけ』『教育国語』91号(むぎ書房)
奥田靖雄 1959「よみ方教育の内容と方法」『教育』109号(12月増刊号)国土社
(1974『読み方教育の理論』むぎ書房に所収)
奥田靖雄 1963「文学作品の内容について」『教育』154号
奥田靖雄 1964「文学作品の構造について」『教育』173号, 174号
(いずれも, 1964『国語教育の理論』むぎ書房に所収。)
奥田靖雄 1995「二次読みのこと」『教育国語』第2期19号むぎ書房
奥田靖雄 1991「テーマをめぐって」『教育国語』第2期1号むぎ書房
奥田靖雄 1992「テーマをめぐって ―絵本のばあい―」『教育国語』第2期5号むぎ書房
奥田靖雄 1993・94 「動詞の終止形」(『教育国語』2-9,12,13 むぎ書房)
奥田靖男 1999「現実・可能・必然(下)」言語学研究会編『ことばの科学9』むぎ書房
奥田靖雄 2000「イデーをめぐって」『教育国語』第3期8号
*上記の奥田靖雄の諸論文のうち文学理論に関わるものは, 2011 奥田靖雄著作集刊行委員会
編『奥田靖雄著作集1 文学教育編』むぎ書房に所収。
佐藤照勝 1987「文学作品の主題 ―その理解についての試論―」『教育国語』90所収
宮崎典男 1980『文学作品の読み方指導』むぎ書房
工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』(ひつじ書房)
千田晃一 2010「実践報告 文学作品のよみ方指導」
(12.27 教科研国語部会(小原集会) 岩手 未公刊)